# ―Legurus―　ただ、笑顔のために

フリューナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

## 注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
―Ｌｅｇｕｒｕｓ―　ただ、笑顔のために

【Ｎコード】
Ｎ５２１９ＢＡ

【作者名】
フリューナ

【あらすじ】
この世ならざるもの『凰魔（おうま）』。
ふと世界に現れては破壊を行う『凰魔』と闘い、世を守ろうとするもの『契（ちぎ）りの鳳（ほうか）華』。
だが、その真実は誰にも知られず、誰の記憶にも残らなかった。
そんな世界の真実と虚構が交差する場所『香叉空（かさから）』。
その運命の場所で繰り広げられる、少年少女たちの戦い。
時に非日常に苦しみながら、時に日常を謳歌しながら、若者達は生きている。

これは、そんな少年少女たちの戦いの物語。

# プロローグ

夢。

それは、記憶。

過去。

それは、現実。

今。

それは、理想。

未来。

それは、想い。

繋がっているようで、離れている。そんな四者のあり方。

それらすべてが交差し、意味となす。

世のあり方。その四つの事柄が、世界を形作るもの。

『人の想いは未来を作り、理想を抱く者が今を生きる。現実は過去の砂漠に埋もれ、記憶が巡る夢を見る』

想うから、未来は生まれる。生きているものなら誰でも、明日を望むから。

理想は、今この瞬間を生きる力。行動することこそが理想を実現させる力。

現実を見るものは、過去から何かを学んでいる。そして、失敗する。

記憶は、夢となって現れる。ただ、経験したことを処理する脳の機能。

それこそが、人の根源だと信じていた。

だけど、どこでそんな言葉を覚えたのか、そんな事は覚えていなかった。

いや、元々自分の中にあったのかもしれない。そう想っていたから、そう考えたのかもしれない。

でも、そんな事はどうでも良かった。

ふと浮かんだその言葉。その言葉の意味が、俺にはよく分からなかったんだ。

ただ、分かることが一つだけ。

その想いが、人を生かしているということ。

その想いが、俺という存在を形作っているということ。

それでも、俺には疑問符がくっきりと浮かんでいた。

ただ、日常を平穏に生きていた俺には。

世界の表と裏。真実と虚構が交差する、本当のこの世の理を知らなかった俺には、分からなかったんだ。

## いつもの朝

――見つけた――

そう聞こえた気がした。

――会いたかった――

そう唇が動いた気がした。

――愛してる――

そう、言われた。

夢のような、ふわふわと浮いている不思議な感覚。

痛みはある。だけどこれは夢だと分かってしまう。

そんな世界で、俺は出会った。

どこか機械的な赤い金属の翼を持った、とても美しい少女と。

そんな少女を、俺は美しいと思ってしまった。

破壊された住み慣れた街の中でただにっこりと笑う少女を。

唐突に口が開く。

その美しい唇から飛び出したのは、告白。

愛の、言葉。

――君と、一つになりたい――

その言葉は、とても純粋で。

――大好きだよ――

その言葉は、とても愛おしくて。

――だから、見てて――

その言葉は、とても楽しそうで。

――必ず、『』――

その言葉は、俺を求めていた。

そして、その先に聞こえた言葉。

その言葉を、俺は無意識に聞かなかった。

差し出されたその手を、振り払ってしまった。

そこで、俺の夢は終わった。

「――――っ！」

朝。春の陽気の漂う、気持ちのいい朝の空気が入る部屋で、一人の少年が飛び起きた。

「……あれは…一体…？」

夢見が悪かったのか、そんな言葉を漏らしながら冷や汗の伝う額を拭う少年。

だが、すぐにその感覚を振り払って体を伸ばした。

体の奥深く、芯に空気を取り込むように深く息を吸い込み、細く息を吐く。

そして、少年は完全に覚醒した体を、寝ていたベットから降ろすため手をゆっくりと下ろし力を入れた。

むにゅ

「ん？」

ベットから降りようとした少年の手の平を、なぜかそんな感覚が襲った。

生暖かく、恐ろしいぐらいにすべすべとした柔らかい物体。いつまでも触っていたくなるような、そんな心地よい感覚。

その感覚が何なのか。それを確認する為に、少年は下を向く。

「…んぅ…むにゃぁ…」

「……」

その物体と、その物体の所有者を認めた後、少年はその所有者に天罰を下した。

かなりいい笑顔で。

ギリギリギリギリ…！

「いひゃいいひゃいいひゃいいひゃい！」

にへーっとだらしない顔で眠る少女の頬を、思いっきりつねる。

とりあえずつねる。千切れんばかりに。

その寝ていた少女は、突然襲った凄まじい痛みに跳ね起きた。

「ちょっ！　圭！　痛いってば！」

「勝手に人のベットに潜り込んで、だらしない顔して眠っていた罰だ」

「罰ってなんかひどくない！？」

「ほう…もう一回やってほしいと言っているのかな？　我が姉は」

「すいませんごめんなさいもうしませんから許してください」

目の前で綺麗な土下座を決める少女は、少年の姉、帷一乃（とばりかずの）。左右非対象に括られた二つの髪の束と、右の目元の下と左の口元の下にある二つのほくろが印象的な少女だ。

そして、この部屋の主である少年、帷　圭椰（けいや）は朝から土下座をしている一つ上の姉を見ながら、軽くため息を吐いた。

「はぁ…一ねぇ、そんな事言っても無駄。一回もその約束守ったこと無いくせに」

「うっ…」

罰が悪そうに顔を歪めて圭椰の言葉に反応する一乃。

この姉弟、どちらが上か分からない。

「ったく、いい加減に俺のベットに潜り込むの止めろよな。彩（あや）が見たらどうすんだよ」

「いいじゃんかー。彩ちゃんだって、きっと一緒にやってくれるよ？」

「ねーよ。…そういや飯か。リクエストは？」

「圭！」

「却下」

喜色満面に叫ぶ姉を一言で切り捨て、圭椰はキッチンのある一階へと降りていった。

「…あ、お兄ちゃん…おはよ…」

「おっす彩。いつも早いな、感心するぜ」

「…お水、やらないといけないから…」

「あー、なるほどな。で、お前は何か朝食のリクエストとかあるか？」

「…味噌汁。さつまいもバージョン」

「はいよー」

そう言ってキッチンのある部屋の中へと入って行く圭椰。

慣れた手つきで食材を切り初め、その切るリズムはまったくと言っていいほど狂わない。

さすがは帷家の台所を統べる長男である。

そして、その後ろ側でテキパキと無言で作業をしているのが、妹の帷　彩香（あやか）だ。

髪を真っ直ぐに伸ばしており、その伸ばした髪を大きな青いリボンを使って後ろ側で撫で付けている。

食器を淡々と並べながら、圭椰が料理を作るリズムに合わせて彩香は小さく鼻歌を歌う。

その鼻歌を聞きながら、圭椰は本日の朝食を完成させた。

「おー、おいしそうだ！」

「一ねぇ、服を着てくるといい」

「…あと、髪の毛…ボサボサだよ？」

部屋の中で見たままのシャツ一枚で、折角結んである髪がボサボサの姿の一乃を、圭椰と彩香がそろって注意する。

ちなみに、そのシャツの丈が合っていないのか服の下の薄桃色の下着を隠せてはいなかった。

だが、その事は下の兄妹共々無視しており、それがいつもの事であった。

「うぐ…。待っててよね！　五秒で支度して来るから！」

「はいはい」

慌しく家の中を駆け回る長女、一乃。

椅子にちょこんと座りながら料理が運ばれてくるのを待つ次女、彩香。

そして、それを見ながら粛々と料理を並べ始める長男、圭椰。

いつもの平和な帷家の朝が今、始まった。

カチャカチャ…

「…はむ…。ん、おいし…」

「喜んでくれて何より」

味噌汁の中に入れたご要望通りのさつまいもを口に入れた彩香は、小さく頷きながらさつまいも入りの味噌汁を口に運んでいく。

その際に発せられた称賛の言葉を、圭椰は軽い感じで返した後、おもむろに持っていた箸を投げた。

「いっただきまーす！」

「座って食え」

圭椰から真っ直ぐに投げられた箸を空中で掴み取り、そのまま机に置かれた茶碗を掴む一乃。

そしてそのまま食事を開始しようとする姉に、圭椰は冷たく言い放つ。

だが、一乃は全く気にしていないようで、きちんと席に座った後は茶碗に盛られたご飯を掻き込んでいた。

「ふぉーひへばさぁー」

「…口の中の物を飲み込んでから喋れ」

「…お姉ちゃん、汚い」

強かに注意された一乃は、急いで食べ物を飲み込んだ後、もう一度言い直した。

「…ごっくん…。そう言えばさー、今日から新学期だけど、二人は何かあるの？　昼からの予定とか」

「ないな」

「…右に同じ」

自らの提案に乗ってくれたことが嬉しいのか、一乃はにっこりと笑うとこう問いかけた。

「じゃあさじゃあさ、お昼から皆でどっか行かない？　家族水入らずで」

「いいけど…。確か、今日は全員昼上がりだったよな？　金とかあるのか？」

「だーいじょうぶ！！」

自信満々に自分の自己主張の強い胸を叩き、どこから取り出したのか、札束を机の上に置く一乃。

その札束を見た圭椰は、なるほどと言うように手を叩いた。

「なるほど。確か春休みの間バイトしてたよな、一ねぇは。いくらあんの？」

「知らなーい」

「は？」

「…ひぃ…ふぅ…みぃ……あ、ちょうど十五万あるよ…」

札束を手に取っていた彩香が、数えた金額をボソリと伝える。

その額を聞いた圭椰は、意外という顔で札束を手に取った。

「へー。頑張って貯めたんだな」

「あったり前じゃん。この一乃様が汗水流して働いて得たお金だよ？　有り難味を持つように！」

「…やってたのは、ただのコスプレ」

「彩ちゃん！？」

「…お兄ちゃんと、見たことある。確か…変な耳のついたメイド服、着てた」

「ああ、犬だか猫だかよく分からない耳のついた奴な。結構似合ってたし」

「んみゃぁーーー！！」

顔を真っ赤にさせた一乃が、そんな意味の分からない言葉を叫びながら立ち上がる。

その突然の姉の行動を流しながら、圭椰は最後の魚の切り身を食べ、彩香はさつまいもの欠片を口に入れた。

今日も帷家は平和である。

## ちょっと変わった入学式

「んじゃ、俺は先に行くぜ？」

「あ、圭は入学式だったけ？」

「ああ。中高大一貫だから、面倒くさい事が無いと思って入ったのに、なんで入学式なんかがあんだよ…」

「仕方ないでしょー。だって、高校からとか大学からとか入ってくる子がいるんだから」

「…それに…留学生も多いって聞いた…」

「へー。俺の学年にはそんな奴らいないけどなー…。あ、やべ！そろそろ行かねーと！」

「いってらっしゃーい！」

「…いってらっしゃい」

慌てて出て行く圭椰を、大きく手を振る一乃と控えめに手を振る彩香が見送った。

圭椰が走って向かう先は、私立香叉柄（かさがら）学園。

圭椰の言った通り、中高大一貫の生徒数千人を楽に越えるマンモス

校である。
そのため、かなり敷地が大きく、そこに造られている建物の量と大きさも半端ではない。
やけに充実した広々とした食堂。何のためにあるのか分からない、地下に造られた体育館など、その奇っ怪さでも有名な学園である。
その学園に向かうための唯一の一本道、通称カサミチを走り、圭椰はその学園の門を潜った。

キーンコーンカーンコーン…
「ふー…。何とか間に合ったぜ…」
「なーに言ってんだ。チャイムと同時に飛び込んできたくせに」
「るせ。間に合ったんだからいいだろうが。つか、何で来なきゃいけないんだ？　ありがたくもなんともない、ただ面倒くさいだけの話を聞くためにさ」
「社交辞令って奴さ！」
「絶対違うよな、それ…」
予鈴のチャイムが鳴ると同時に入学式の会場である体育館に入って

きた圭椰に、背の高い長身の男子の声がかかる。
その言葉に、圭椰は少し面倒くさそうではあるが愚痴をこぼす。
「っていうか帷、今日はずいぶんと遅かったんだな。俺様なんか、筋トレしてたぐらいだぜ？　見ろよこの筋肉！」
「見せるな筋肉を、暑苦しいから」
なぜか腕を捲り、自らの自慢の肉体を披露する少年。
その長身につけた筋肉は、圭椰の言う通り暑苦しさと圧迫感を全面に押し出していた。
「筋肉言うな！　これは俺様の輝かしい奇跡だ！」
「うるさいクズ肉」
「んなっ！　…帷、お前表出ろやぁ！」
「あ？　やんのか？　今まで俺に一回も勝ててねー奴が？」
「今回は俺様が勝つ！　だからとっとと表出ろ――――」
「入学式始まる前に暴れんじゃないの！」
スパッシーーーン！！
売り言葉に買い言葉で熱くなっていた少年の頭を、大きく振りかぶった白い大きなハリセンで思いっきり叩く。

盛大な音を立てて叩かれた頭を抑えながら、筋肉質の少年、久我山(くがやま)陣平(じんぺい)はその叩いてきた犯人を睨みつける。

「てめ、小見河(こみかわ)！」

「うるさい、さっさと並ぶ！　他の人たちも困ってるでしょうが！」

「ぎぎぎ…」

「もう一発いっとく？」

「ぐ…分かったよ…」

ハリセンをゆらりと構え直した長髪を真っ直ぐに下ろした少女に、陣平は根負けしたように渋々列に並んでいった。

そして、その少女は今度は圭椰の方に向き直ると、ハリセンをびしっと圭椰の眼前に突き出した。

「どっから出したんだよそのハリセン…。つか、降ろしてくれないか？」

「…帷君、あなたもあなたよ。何であんな煽るような事言うの？」

「わりわり。でも、あれぐらいの方が張り合いがあんだよ。委員長もそう思うだろ？」

「思いません。それに、委員長はもうやってないの。もうこれから高校生なんだし。ちゃんと名前で呼んでよね」

「お前ならまた委員長になる気もするけど…ま、いいや。じゃ、同じクラスになれるといいな、小見河」

「ふん…。いいから早く並びなさい」

「そういうしっかりした所が委員長なんだよ。ま、それはそれで可愛いけどな」

「かっ／／／！　かかか、かわいい、なんて…／／／！　帷君！そこに正座しなさい！」

「は！？　なんで！？」

「いいから／／／！」

「絶対に、嫌だ！」

入学式が始まるまで、長髪のハリセンを携えた少女、小見河　菜美（なみ）と圭椰の追いかけっこは終わらなかった。

「えー…であるからしてー…君たちはー…なのですー…」

「（…だるい…）」

ヒゲをこれでもかと言うぐらいにたくさん蓄えた理事長の話を、圭

椰は完全に耳に入れていなかった。

まあ、君たちはこれから高校生になるので、さらにより一層勉学に身を入れて励みましょうととと言われても、誰もその気にはならない。

ついでに言えば、圭椰は常にと言っていいほど成績上位組に食い込んでいるので、今更勉学に力を入れるつもりは無かった。

「（勉強だったら一ねぇに教えてもらえばいいし、アレでも成績は普通だからな）」

仲のいい姉弟だからこそできる考え方である。

さらに、それは相手がそこそこ頭が良くなくてはいけないのだが、圭椰が思うに一乃の成績は普通だ。

それでも教えてもらえると思っているのは、彼の時々出る頭の回転の早さによる所が大きいのだが。

「（…それより、朝のあの夢は何だったんだ？　妙に生々しかったけど…）」

そこまで考えた所で、圭椰は今朝見た夢を思い出した。

妙に生々しいというより、夢と分かった現実。そんな意味の分からない夢。

そこで見た美しい少女。その少女の表情を思い浮かべた途端、圭椰は少し頭に頭痛を覚えた。

「（っつ…。あんな女の子は見たこと無いぞ？　あんな悲しそうな顔した子なんて…。それにあの翼…）」

機械的な金属の赤い翼。

その異質なものに、圭椰は頭を悩ませていた。

「えー…今年の新入生は一組に…」

「なんだったんだ、一体…」

「何がだ？」

「いや、朝に見た夢が…ってうお！」

急に話しかけられたことに、圭椰が体全体を仰け反らせながら驚く。

その話しかけた相手の陣平は、圭椰の反応に少し傷つきながらも話を進めた。

「そんなに驚くなよ…。で？　何を見たんだ？　エロい夢とか？」

「んな訳あるか。…お前に相談なんかしても無駄そうだな。悩みとか無さそうだし」

「何を言うか。俺様の悩みは今現在も進行中だぜ？」

「どうせ『筋肉の張りをどうやったらもっと凄くできるか』とかだろ？」

「その通りだ！」

その自信満々に答えた陣平の態度が気にくわなかったのか、とりあえず話を終わらせるためにただ手を振る圭椰。

そして、その手を振り終わると陣平に問いかける。

「それより、話終わったのか？　お前がここにいるって事は、もう終わったんだろうけど」

「何言ってんだ？　ここには俺様と帷しかいないぞ？」

「は？」

陣平の言う通り、入学式が終わりすべての生徒が出払った体育館は閑散としていた。

そして、そのいい笑顔で笑う陣平に、圭椰は低く笑いかける。

「へー。まあ話をまったく聞いていなかった状態で考え事をしていた俺も悪い。話かけられても驚くぐらいにな」

「帷…？」

「だがな、この後にあることを考えたら先にそっちに行くように優先するよな？」

圭椰が言いたいのは、この後に控えているのはクラス分けの発表と、そのクラスでの担任からの話だ。

それはつまり、新学期始まって初めての授業ということであり、サボりたいことはサボりたいが一応皆勤を狙っている圭椰としては、もっとも外せない所なのである。

「あのー…帷、さん？」

「なあ？　クズ肉」

黒いオーラを出しながら、冷や汗をかいている陣平に迫る圭椰。

なかなかに怖い、笑ってはいるが目は笑っていない笑顔で。

「って、帷？　それが分かっているんだったらここは穏便に…」

「遅れるのは、お前だけでいいよな？」

「へ？　それはふざけ…！」

ドスン！

「ぐほぉ！」

二人の少年以外誰もいない体育館に、陣平のくぐもった叫び声と人の体からは絶対に出ないような鈍い音が響いた。

## お約束の時間

「…よし。…何とか間に合ったか」

本日二度目の間に合った宣言をした圭椰がいるのは、彼の通う教室の前。

一年一組。それが彼のこれから通うクラスの名前だ。

圭椰本人としてはどうでも良かったことだが、この一年一組がある教室は高等部がある棟の一番端である。

何の嫌がらせか分からないぐらいに遠いのだが、これ幸いとばかりに一番食堂が近い。

そのため、毎度毎度起こる食堂での戦争ではこのクラスが一番勝率が高いのである。

まあ、圭椰のような弁当持参組はどうでもいい事なのだが。

「えーっと、俺の席は…」

「ここよ。結局あなたと同じね、帷君」

「お、小見河じゃんか。ラッキー」

見知った顔を見つけ、喜びながらその席に座る圭椰。

どういう席順と配置なのかは知らないが、圭椰が座った席は教室の一番窓際の一番後ろ。

その丁度右前に菜美が座っている。

「久我山君は？　一緒じゃないの？」

「体育館に置いてきた。ま、そろそろ復活して――――」

「とぉぉばぁぁりぃぃ！！！」

「ほら来た」

なぜか全身汗だくになりながら陣平が教室に入ってくる。

その様を圭椰は冷静に見つめながら、入ってきた陣平の足を引っ掛けた。

クルッ

「おあ？」

「座れ。汗臭い。こっちくんな」

綺麗に足元から救われた陣平は、そのまま机やら椅子やらを巻き込んで悲惨な事故になると思われたが、圭椰の絶妙な足捌きでそれは無かった。

正直な所、前のめりになった陣平を足で蹴り上げて回転を止め、そ

こから踵落しで強引に席に座らせたことを絶妙な足捌きというのかは疑問だが。

そして、その際に発せられた毒舌は菜美の顔を歪ませるものでもあった。

「う…確かに汗臭いわね…」

「だろ？　こいつ汗とか拭かないから。シャワーなら浴びるらしいけど」

「何言ってんだ！　汗は筋肉の涙だぞ！？　拭くなんて勿体ない！」

「うるさいクズ肉。ホームルームまで寝てろ」

ガスン！

今度は拳で思いっきり陣平の額を殴り、そのままの回転を生かして机へとその額をめり込ませる。

そこまでやった後、クラスからどよめきが起こった。

「おおー！　今年も見られたぜ、あいつらのあれ！」

「今度のオッズはどうなるのかしらね？　やっぱり帷君が圧勝？」

「いや、陣平のタフさも異常だからな。今はあーやって堕ちたけど、今度はどうなるか…」

「ま、それでも楽しみだわ！　特に体育祭とか！」

わいわいがやがやとその喧騒を取り戻すクラスメイトたち。
その光景はいつもの事で中学からの付き合いの、さらには同じクラスが続いている圭椰と菜美にとっては珍しいことではなかった。
陣平もその中に入っており、陣平がボケ、圭椰がツッコミ、菜美が纏めるという形で落ち着いているのである。
だが、今回ばかりはそのクラスの反応に圭椰が少し違和感を感じた。
「なぁ小見河。なんか少なくないか？　こう、少しだけだけどさ」
「また聞いてなかったの？　この高校から入る人は一組に全て集中させるから、そのつもりで仲良くするようにって、理事長が言ってたじゃない」
「へー…。まったく聞いてなかった」
「だと思った。転入生は全部で二人、だから少ないと思ったのよ。ま、これだけの変化に気づくあなたもすごいけどね？」
「へー…よく知ってんなー。さすが情報通」
「それも理事長が言ってた。…まったく、興味が無いと決めたら本当に無関心ね、帷君は」
菜美が呆れてため息を吐いた頃、丁度担任が入ってきて号令がかけられる。

その号令を任されたのは菜美だったが、誰も文句は無かった。

伊達に中学三年間委員長を務めてはいない。

「あーっと、理事長から聞いてるとは思うがー、このクラスに転入生が入る。中学時代いなかったからってハブるなよー」

そんな台詞を宣いながら、担任教師が転入生を連れてくる。

入って来たのは女。かなり癖の強い髪なのであろう、右目が完全に髪の毛で隠れてしまっている。さらには小柄で、制服がかなりだぼだぼだった。

その登場に男子生徒からの怒号が上がり、女子生徒からは羨望の眼差しが向けられる。

最後も女子で、快活そうな雰囲気を身に纏った、なぜか頭にゴツいゴーグルをつけている少女だ。

その少女を見て、クラスメイトは先の少女とほぼ同じようなテンションになるが、圭椰だけは対して興味なさそうに外を眺めていた。

「高碕（たかさき）、誌伊奈（しいな）です」

「やっほー。ボクの名前は弓希颯（ゆみきはやて）だよ！　気軽に颯ちゃんって呼んでねー？」

一人はただ淡々と。もう一人は元気が溢れたように。

対照的な少女たちの自己紹介が終わると、男子女子ともにそのボル

テージは振り切れんばかりに高まる。

どうしてこうテンションが上がるのか。圭椰はまったく分からなかった。

「えー、二人ともこの学園に関しては右も左も分からない者ばかりだ。なので、お前たちが率先して協力してあげるように。えー、小見河」

「はい」

「こいつらの面倒を見てやってくれ。こう言うの、得意だろ？」

「…はい」

「以上だ。ホームルームもこれで終わりだ。来週の頭からすぐに授業だからな、忘れ物をしないように。では、解散」

担任の鶴の一声で、そんな二人の少女の初の登場はすぐに終わった。

学園内の中央に位置する広場。

ベンチなどがそろう中庭のような場所に向かった圭椰は、そこでお目当ての人物と再開した。

基本的に学年が違うこの三兄妹は、こうやってこの中庭に集まるの

が通例となっている。
そのために、そこには先にホームルームを終えて待っていたであろう一乃と彩香が待っていた。
「おーい！　こっちこっちー！」
「わりぃ一ねぇ、彩。意外と捕まっちまってな」
「捕まる…？」
「ああ。朝に言ってただろ？　入学式がある理由とか」
「おお。じゃあ圭のクラスに来たんだね？」
「理事長が全て一組に集めるとかほざきやがってな。女が二人」
「女？」
「おう。その自己紹介とかで遅れたんだよ」
「女が二人も…圭の所に…」
しかもその二人が出て来た時のクラスの反応がさー、と圭椰が言った途端、一乃が切れた。
「うがー！　圭はあたしのだもん！　絶対誰にも渡さないひゃいいひゃいいひゃいひゃい！」
「そんな事を大声で言わない」

そのまま、まだかなりの人数が残る学園内で叫び声をあげようとした一乃の頬を抓って黙らせる。

せっかくの可愛い顔が台無しだが、圭椰は身内の特権といわんばかりにその頬をこねくり回していた。

「…お兄ちゃん。そろそろ…」

「うりうりうりうり…」

ギュッ

「お？」

一乃の頬の感触を楽しむように弄っていると、彩香が圭椰の制服の裾をつかむ。

その妹の可愛らしい仕草を見た圭椰は、いつもしているように妹の頭をぐりぐりと撫でた。

「…お姉ちゃんばっかり、ずるい」

「何がずるいかは知らんが、お前にもしてやるよ」

「…ん」

目を細め、気持ちよさそうに圭椰の手を受け入れる彩香。

その対照的な二人の家族を見て、圭椰はこう思う。

一乃が猫ならば、彩香は犬だなと。

だが、その様子を第三者が見ればこう思うだろう。

圭椰が一番お兄ちゃんだと。

## 崩れ去るとき

「ぷはー！　食べた食べたー！」

お腹を擦りながら、一乃がそんな台詞を口にする。

三人が行っていたのは何のことは無いファミレス。

一乃が持つお金的にはもっと高い所でも良かったのだが、それは圭椰が止めた。

曰く、「その金があるなら、これからはもう少しだけ豪華な飯が作れるな」と。

止めたというより、一家の食事情を背負う者の立場として言った台詞なのだが、それに反応しない一乃と彩香では無い。

一瞬のうちにアイコンタクトをすませ、圭椰に向かって今日はファミレスにしようと言ったのだ。

なぜかと言うと、圭椰の料理は二人の中で最高のご馳走であり、一番好きな料理であるからである。

「一ねぇ、親父くさいぞ？」

そんな家族の想い等露知らず、圭椰は一乃に向かってそう突っ込む。

ちなみに、彩香も同じようにお腹を擦って満足そうにしていたのだが、その圭椰の一言ですぐにその動きを止めた。

嫌われると思ったのだろうが、圭椰がそんな事を気にする玉ではない。

「親父じゃないもーん。お父さん達は出張でいないけどさー」

「いつ帰ってくるんだ？　たしか、海外だろ？」

「…うん。芸術家さん、だから」

「ま、帰ってきた所で飯の役目は俺だがな。…っと、買出しに行ってくるか。安売りが始まるし」

「じゃああたしは帰って戦利品の獲得を待ちわびております！」

ビシッと言う音がしそうな敬礼を圭椰に向かってした一乃は、かなりの速さで家路に着いた。

土煙が上がるその方角を見ながら、彩香もその後に続く。

「…私は、水やりがあるから」

「ああ。ったく、一ねぇの買い物嫌いもすごいもんだな」

「仕方ない…。じゃ、お兄ちゃん、またね…」

「おう」

小さく手を振りながらそう言って家路に着く彩香。
そんな妹の背中を見届けると、圭椰はくるっと一回転し、商店街のある道へと歩いていった。

お昼時だというのに、圭椰が向かったスーパーは繁盛していた。
「…えーっと、何が切れてたっけな…。…お、卵安いな。あー、でもまだあったような…あ、なら温泉卵でも作るか。後は魚を…」
献立を考えながら買い物を続けていく圭椰。
なかなかに主婦顔負けのその買い物籠を持つ姿は、一高校生が出していい雰囲気ではなかった。
「よし…これだけあったら満足いくものが作れるだろ」
満足げにスーパーを後にし、食材が入った袋を片手に家路へとつく圭椰。その足取りは軽く、どこか楽しげでもあった。
「んー…父さんも母さんも帰ってこないのなら、一回何か作り溜めしてみるかな。…あの二人、帰ってくる時は唐突だし…ん？」
ぶつぶつと今後の予定を口にしながら歩いていると、圭椰の目にあるものが目に留まった。

道の真ん中をとぼとぼと一人で歩く、どこか悲しげな雰囲気を身に纏った少女。

Tシャツ一枚にジーパンだけと言う、この春の始まった時期には少し肌寒い格好をした少女に、圭椰は少し興味を引かれた。

同情や心配などではなく、なにか訴えかけるものがあったのだ。

「…一人か？」

ぶっきらぼうとまでは言わないが、ナンパでもない喋り方でその少女に声をかける圭椰。

かけられた声に反応した少女は頭を上げる。

そうする事で、圭椰は初めて少女の顔を見ることが出来た。

無表情。知らない男に話しかけられたと言うのに、全くと言っていいほど感情の起伏が感じられない。

そして、圭椰はその少女にこんな感想を抱く。

「（…羽根？　いや、ただの髪だよな…それに、この瞳の色…）」

明らかに自然にではない髪の毛のふわふわとした揺れ方。翡翠色の輝く右の瞳に、黄土色の鈍い左の瞳。

不思議なことだらけの少女に、圭椰は頭を悩ませる。

「（オッドアイなんて珍しい…日本にこんな子いたんだ…）」

シュオオォォ…

「ん？」

何かが溶けるような、何かがその存在を変質させるような、そんな不思議な音を圭椰の耳は確実に拾った。

そして、その周りにいたはずの気配が消える。人の気配全てが、忽然と消えていた。

思考をすかさず停止し、その音の発信源を突き止めようとする。

だが、その発信源の音はすぐさま見つかった。

「がっ！」

少女の腕が、圭椰の首をつかみ持ち上げる。

そのか細い腕からはまったく想像も出来ない力に、圭椰は成す術もなく手に持っていた袋を落とし、その体を浮かばせる。

そして見た。少女の着ていた服が粟立ちながら溶けていく様を。

「…くすっ」

「――――っ！　は…なせ！」

微笑んだ笑顔はとても綺麗なものだったが、圭椰にとってその微笑みは恐怖でしかなかった。

持ち上げている手を握りながら、渾身の力を込めてその手を引き剥がそうとする。

だが、その腕は全くと言っていいほど動かない。まるで石にでもなったかのような――――

「ぐ…あ…っお前…！　その腕…！」

圭椰の想いは、そのまま視界に目から入ってくる情報と、手から伝わってくる感触として正しく認識された。

無骨なごつごつとした石の腕は、圭椰の首をギリギリと締め上げていく。

「キケンハ、ツミトル」

「あ！？　いいから…手を…！　がはっ、ごほっ！」

初めて聞こえた少女の声は、無機質でいてその無表情にあった声だった。

そして、その少女からそんな声が聞こえたと思うと、圭椰の首を握っていた石の腕がその拘束を緩め、圭椰を離す。

圭椰はすかさず少女から距離をとり、大きく息を吸い込む。

落ち着くためでもあるが、今まで息がまともに出来なかった分の補給だ。

「ごほっ。お前、いきなりなにを！」

「キョウイハハイジョ。ハイジョ。ハイジョ。ハイジョハイジョハイジョハイジョハイジョハイジョハイジョハイジョハイジョハイジョハイジョハイジョハイジョハイジョハイジョハイジョハイジョハイジョハイジョ」

「は？　ごはっ！」

狂ったように『排除』を連呼する少女に、圭椰は不信感を募らせる。

なるべく距離をとるように体を引いていた圭椰だが、気づいたときにはその体は中を舞っていた。

蹴られた。そう理解するまでは時間はかからなかった。

圭椰を真っ直ぐに蹴り飛ばした体制で固まる少女を見た後、圭椰の体は背後の店に吸い込まれていく。

「ぐぁ……いてぇ……」

店にあるものを薙ぎ倒しながら、圭椰の体はようやく止まった。

「ハハハ？　キャハ？　キャハハハハハハハ！！！！！」

朦朧とする意識の中、圭椰は狂った少女の笑い声を聞く。

首を左右にカタカタと揺らめかせながら迫る少女に、恐怖を覚えながら。

「だけど…このままって訳にもいかねぇよな…。…ふっ！」

近くにあった棒を手に取る。

特に何かの武道の心得があるわけでもない。ただ、あるのは薄っぺらなプライドと抵抗心。

圭椰はこれまで生きてきた中で、何かを真剣にやったことなんてなかった。ただ、普通に生きていれば、普通に結果がついてきた。それで、満足していた。

人に何かを誇るでもない、そんな薄っぺらな人生。

陣平や菜美。姉の一乃に妹の彩香。親しくしてきた者達にも、どこか一線を置いた付き合いをしてきた。

だが、今だけは違う。自分の意思で、今までとは違うことを圭椰は今、行っている。

なぜかは分からないが、今はそうした方がいいと感じていた。そうする事が、最善だと。

尋常ならざる集中力を発揮している彼の心と思考が、目まぐるしい速度で考えを弾き出した、その結果だった。

「ま、たまには真面目に頑張ってみるさ！　死ぬのは、嫌だしな！！」

「…キヘッ。キヘヘヘヘ…クカカカカカカ！！！！」

最早壊れた笑みしか零さなくなった少女に、圭椰は棒の先端を向ける。

そして、言った。生き残ると。

## 夢と同じ現実

『凰魔(おうま)出現地特定。香又空(かさから)市中央、商店街エリアです』

『周辺市民の半数がエリア外へ。その他半数は次元境界発生の影響により死傷。応急警護部隊の発進急げ』

薄暗い、細々とした機械に囲まれた部屋の中で、男と女の声が交互にそう状況を伝えていく。

『ウォーリアーは待機ベットへ。作業班は最終チェック急げ。これは訓練ではない。繰り返す、これは訓練では…』

バンッ！

「だから！　あたしが行くって言ってるの！　あそこには、圭がいるかもしれないんだから！」

机を叩く音が薄暗い部屋の中に響く。

空中投影された地図の一点を指差しながら、そう叫ぶ一人の少女。

目元と口元にあるほくろが印象的な、左右非対称に髪の毛を纏めた少女。一乃である。

今、彼女は学園の制服ではなく、少し変わった服装を身に纏っていた。

肩についた横に大きく張り出したパッド。首下が大きく開き、その開いた部分には兵士がつけるようなタグが煌く。

腹周りはすらっとしており、足元には外に流れるような突起状の棘がつけられている。だが、ふくらはぎと脛の部分は大きく開けられ、肌が露出していた。

そして、背中も同様に肩甲骨から腰骨の辺りまで大きく二つのラインが入っており、その部分も肌が空気に触れている。

端から見れば少し恥ずかしい格好ではあるが、一乃はその格好のままある人物に詰め寄った。

「行くも何も、今のお前の装備では無理だ。機構具現化システムが異常をきたしているお前を、あの場に送り出すことは出来ん」

ヒゲをこれでもかと言うぐらいにたくさん蓄えた壮年の男は、手元にディスプレイを表示させてその中のデータを一乃に見せる。

だが、一乃はまだ引き下がれないのか、ぐぐぐと唸りながら壮年の男を睨む。

『絃内（げんない）司令。凰魔の映像、出ます』

「繋げ」

「っ！　圭！」

二人の前に現れた映像に写っていたのは、両腕の石の腕を容赦なく振るう少女と、完全に劣勢状態の圭椰の姿。

その映像が出た当初にも、圭椰が綺麗に吹き飛ばされる様が写っていた。

圭椰の着ていた制服は所々破れ、香又柄学園のゆるい校則でも引っかかるぐらいの制服の具合であった。

そんな弟の姿を見て、一乃は悲痛な叫びを上げ、触れることの出来ない映像に向かって手を伸ばす。

だが、そんな一乃を嘲笑うかのようにむなしく空を切った手を握り締めると、耳につけたインカムに向かって怒鳴る。

「彩ちゃん！　今すぐ私のを整備して！　一分で！」

「…お姉ちゃん…耳、痛い」

インカム越しに、妹の彩香の困惑した声が届く。

「さすがに、無理…。…お姉ちゃん、前のでかなり、無理したでしょ？　『焔岩朱（フレアレディ）』も文句、言ってた」

「うぐ…あの寝てばっかりのフレちんが…」

「だから…無理…今回は、お留守番…」

「でも！　あそこには圭が…！」

「わかって、る！」

珍しい彩香の大声に、一乃はしばし呆然となる。
温厚というよりかは内気といったほうが早い彩香が声を張り上げるなど、身内である一乃でも数えるのが両手で足りてしまうぐらいなのだ。
そんな妹の思いに、姉が折れないはずがない。
小さく謝ると、妹との通信を切った。
「だが、今の戦力ではどうすることも出来ないこともまた事実。今回の人員も、まだ調整中だ。とても実戦には…」
ヴィー…ヴィー…ヴィー…！
「何事だ！　状況を説明しろ！」
絃内が考えを巡らせていると、急に部屋の明かりが赤く染まり、警告音が部屋の中に響いた。
その警告音に、絃内は通信士に向かって声を飛ばす。
だが、その声に返ってきた言葉は、ひどく焦りが込められていた。
『地下C層区画より入電！　C層区画内に格納されていた内の一つが、地上に向かって強制的に射出されました！』
「なに！？　ナンバーは！？」
『は、はい！　…出ました！　識別ナンバー０００１。『剣刃閃（ブレイザーエッジ）』

です！』

「凍結処分機だと！？　そんなものがなぜ今になって…！」

「圭…。…まさか…！」

絃内の焦りの声と一乃の閃きの声が被さる。

二人が驚くのも無理はない。今しがた報告されたものは、それほどまでに衝撃を与える単語だった。

強制的に射出されたのは、今まで誰もが扱えなかった物。

装身具型自立進化機能内蔵ＡＩ搭載兵器、レグルスの第一号試作機だったのだから。

ガラガラガラ…

「…いってぇ…」

もう何度目になるだろうか。

体を綺麗に吹き飛ばされ、事あるごとに店の備品を壊しながら起き上がるのは。

しかし、これだけボコボコにされているというのに、目立った怪我

が無い。骨が折れていてもおかしくないのに。

そんな事を思いながら、圭椰は目の前の景色を見据える。

「（…えらくボロボロだな…まるで戦時中じゃねーか…。でも、この景色…どこかで…いや、こんな物見慣れてるはずがない）」

脳裏によぎった記憶。懐かしいとも呼べるほどの、そんな雰囲気を持った記憶。

だが、そのよぎった記憶を圭椰は捨て、立ち上がる。

怪我が無いというのに、痛みや体の悲鳴は嫌というほどに圭椰を襲う。

そんな中途半端な体を叱咤しつつ、圭椰は目を向ける。

住み慣れた街を、狂った笑顔と甲高い声で壊しつづける一人の少女を。

いや、もう少女と呼んでも言いか分からない形になっていた。

体の原型はまだ人の体のままだ。だが、元々変質していたその石の両腕は肥大し、もはやただの岩になっている。足や胴体も同様、腕のように変質しており、さながらゲームに出てくるようなゴーレムだった。

「…まったく…何で俺はこんな化け物相手に逃げないんだろうな…」

自虐のような問いを自らにかける圭椰。

だが、いくら経ってもその答えは出ない。圭椰自身も、なぜ今自分がそこに立っているのか、なぜそのゴーレムっぽい化け物に鉄の棒を向けているのか、まったく分かっていなかった。

「…ほんと、こんなのは絶対陣平とかの役目だろ…。なぁ？」

もう言葉が通じないことは分かっている。相手から聞こえてくる、一方的な笑い声だけだということに。

それでも、話しかけずにはいられなかった。

なるべくいつも通りの自分でいられるように。変わってしまわないように。

「…とりあえず、なーんかイライラするんだよ。ほんと、無性にさ」

胸の中で煮えたぎる感情。それが怒りだということは、圭椰は既に理解していた。

だが、それがなぜ怒っているのか。それだけが分からない。

イライラし、ムシャクシャし、全てを投げ出してしまいたい。そんな気持ちだった。

「…でも、こんなチンケな気持ちに流されるつもりは無い。委ねるなんて、俺には似合わないから」

ただ、ゆっくりと。

宣言するように、一人の少年は走り出した。

未だ、自分が何をなすべきか、分からないまま。

姉との通信を切った彩香は、ただひたすら手元の作業に集中していた。

空間投影されたキーボードをひたすら叩き、目の前に現れた英数字の羅列を凄まじい速度でスクロールしていく。

焦りの色が濃い表情で、しかし一切の不備が無いように確認作業を終えていく彩香。

彼女もまた、姉である一乃とほぼ同じような格好である。

ただ、彼女の場合は背中部分の肌は露出しておらず、一乃の肩にあるようなパッドもない。かわりに、二の腕部分が完全に露出している格好だ。

「…間に、合わない…」

焦りが口をついて出る。彼女もまた、兄の惨状を見ているのだ。

そして、通信を傍受して聞いていた。彼の元に、力が迫っていると。

「…それだけは、ダメ…！」

だが、どれだけ焦っても目の前の作業は終わらない。
丸三日かかる作業を、彼女は数時間で終わらそうとしていた。
兄を、危険から遠ざけるために。愛する者に、地獄を見てほしくないから。
『機構具現化システム展開を確認！　し、身体強化率２００パーセント！？　シンクロ値、異常な数値を叩き出しています！』
彩香の思いは、通信士の悲痛な叫びによって打ち砕かれた。
主に整備、調整を行う立場の彩香は、その報告がありえない物であると感じていた。
そして、確信していた。
兄が、力を得たのだと。
「…お兄ちゃん！」
妹の悲痛な叫びは、兄に届いたのだろうか。
「あっちぃぃぃーーーー！！！！」

また体を吹き飛ばされ、また向かって行くと言う無謀な行動を繰り返していた圭椰は、唐突にそんな叫び声をあげた。

周りには火の手は上がっていない。これだけ破壊されたのにも関わらず。

だが、圭椰は『熱い』と叫んだのだ。

右手が燃えるように熱い。いや、もう燃えているのかもしれない。

そんな事を思いながら右手を見ると、そこには光があった。

「…なんだこれ…。…手が光るなんて、新手の手品じゃないよな？」

手から光が溢れるなど聞いたことが無い。と言うより、その光は圭椰の右手から発せられているのだから。

――マスター――

聞こえてきた言葉。

直接、頭の中に響くような声。だけど心地よく、嫌にはならない声音。

――あなたは、力を求めますか？――

確認するような問い。

その問いかけに、圭椰は答える。思いとともに。

「…いらねーよ、力なんて。ま、使い方によっちゃ善にも悪にもなるけど、俺はいらない。いるんだったら、それは力じゃない」

熱い右手を握り締める。

殴られて、蹴られて、そして思いが固まった。

強くはなりたい。でも、それで何がしたい？

それが一番重要だ。手に入れた力で、何がしたいのか。何を、なしたいのか。

「強くならなりたいさ。でも、俺が求めるのはそうじゃない。ただ、周りに、大切な人たちに笑っていてほしい。それだけさ」

笑顔。それが圭椰の一番好きなものだ。

そのためになら、何だってできる。何だってやれる自信が、圭椰にはあった。

――では、握りますか？　その覚悟とともに――

「…覚悟、か。ま、そんな大層なもんじゃないさ。俺はさっきも言ったように、大切な人たちがいるんだ。こんな俺にでも、笑ってくれる人たちが」

握った右手を見つめながら、そう呟く圭椰。

そして、その目の前には彼が今まで挑んでいた異形のものが、その岩の拳を振りかぶっていた。

目の前に迫る岩の鉄槌に、圭椰は叫ぶ。
守るための力を、手に入れるために。
「――だからさ、今はこいつを何とかしないとな。だから今は、力を。自分を守ることが出来るだけの、力を！」
――分かりました、マイロード。私はあなたの剣となりて、その力全てを出し尽くしましょう――
《ｓｔａｒｔｉｎｇ　ｇｏ　ｂｙ　Ｌｅｇｕｒｕｓ　ｓｅｔｕｐ》
その機械的な音声を聞くと同時に、圭椰は右手に宿った光を振り抜いた。

## 手に入れた力

ドクン…

何かが書き変わる感覚。

そんな感覚が、体中を這い回る。

右手を中心に、全ての体の中にある物質が強く、強固になっていく。

吐き気を覚えるような感覚だが、それでも耐えた。

こんな程度で、力が手に入るのならと。

自らを守る事の出来る力。大切な人たちの笑顔を守ることが出来る力。

その力を今、確かに振るった。

ザンッ

何かを斬り裂いた感覚が、何かを握る右手に残る。

《マスター。次、二時方向から来ます！》

突然聞こえたその声に、驚きを隠せずに固まってしまう。

そして、その警告どおりに圭椰の右頬は殴り飛ばされた。

「ぐはっ！」

《マスター！》

今までなら吹き飛んで、店の中に放り込まれるか壁に激突していた体が、その攻撃を喰らっても吹き飛ばない。

ただ、少し首が殴られた方向に伸びただけ。しっかりと、圭椰の足は地面をとらえていた。

「…おい。お前、名前なんて言うんだ？」

一応出方を見るために後ろに下がりながら、圭椰は唐突にそんな質問をした。

相手は自らをマスターと呼ぶ、聞き慣れない女性の声。

確証は無かったが、口にすれば伝わると信じていた。

《私の名前は『剣刀閃（ブレイザーエッジ）』です。マスター》

「ぶれ…え？　ごめん、横文字強くないんだ、俺」

《ブレイザーエッジです》

「…長いな。…レイジでいいだろ？　その方が覚えやすいし言いやすい」

《マスターがそう望むのなら》

そんな言葉を聞こえてきた声に向かって返す圭椰。

そうやって考え事をしていたことで余裕が出来たのか、圭椰は右手に握っていた物の事を思い出す。

「そういや、これ…。これで、あいつの腕を切ったのか？」

やけに機械的な蒼い金属の長大な剣と、それを振るった相手であろうものを見比べる圭椰。

左腕を斬られた相手は、その傷口から真っ赤な血を流しながら圭椰を見据える。

すぐさま飛び掛ってくるという事は無さそうだが、それでも警戒は怠らない。

《はい。そして、その剣こそが私です。マスター、私はあなたの剣、存分に力をお振るいください》

カシンという音を立てながら、そう圭椰に言うレイジ。

だが、圭椰はその剣を改めて強く握り直しながら、その言葉をやんわりと否定した。

「嫌だよ。ま、原理とかその他諸々はよく分からないけど、この剣がお前なら俺はお前を大事にするよ。お前も、俺の大切なものの一員だからな」

《マスター…！》

「さて。早いところ片付けちまおうぜ！　この後には晩飯作らないといけないんだからな！」

そう宣言するように、剣を真っ直ぐに前に突き出す圭椰。

シュン…

相手に対する宣言、レイジに対する報告のつもりで行った行動であろうが、その行動は少しばかり街の破壊具合を進めることになった。

ドゴーーーン！！！

「は？」

《マスター。レーザー発射角調整、右に五度です》

「へ？　レーザー？」

レイジにそう忠告された圭椰は、とりあえず光と轟音を立てた場所を見据える。

その場はものの見事に建物が倒壊し、ただでさえボロボロだった街の景色は、いろんな意味で綺麗さっぱり掃除されていた。

「ええぇぇぇーーー！！！　って、レイジ！　これ、こんなものも出るのか！？」

《はい。あとはミサイルに誘導性を持たせたものや、数は少ないですが実弾も少々》

「ごくごく一般的な高校生が扱っていい物じゃねぇぇーー！！」

レイジの少しだけ楽しそうな声に、圭椰はとりあえず全力で突っ込んでみる。

突っ込みのためにその相手を叩こうにも、レイジの場合は剣が相手なので叩くに叩けない。

《そうでしょうか。では、剣だけの戦いという事になるのですが…》

「それでいい！　絶対にそれだけ！　レーザーとかもってのほか！」

《そうですか…。では、使用ロックをかけておきます》

「そうしてくれ。お相手もなんか驚いてるみたいだし…」

少しばかり寂しさのこもった声を聞きながら、圭椰はゆっくりと剣を構え直す。

ロックがかかっている事は分かっているが、それでも真っ直ぐに剣先を突き出すことはしなかった。

扱った事も触った事もない剣だが、今のご時勢では調べれば何でも出てくる。

投影型ディスプレイに表示させることが出来れば、その場で形の練習が出来てしまうのだ。

まあ、それでも剣の型などをその場で練習しようとするものはいな

いだろうが。

「（…とりあえず…出る！）」

大きく一歩を踏み出す。

すると、圭椰の体は弾かれたように相手をすっ飛ばした先のビルにめり込んだ。

「……ぺっ」

《マスター。今のマスターの体は極限まで強化されています。普段の力の入れ方では、大怪我をしますよ？》

「そう言うことは先に言え！」

《す、すみません…》

律儀に謝ってくれるレイジだが、圭椰はその言葉を半ば流して自らの体の調子を把握していた。

剣を握っていない左手を開いたり閉じたり。両足で地面を思いっきり踏み込んでみたり。

「…めり込むんだ。腰までとは…」

踏み込んでみたことで、圭椰の体は地面に綺麗に突き刺さった。

腰の辺りまで、まるで底なし沼に嵌ったかのようにめり込んでいく体。

だが、脱出は容易だった。少しだけ力を入れただけで、体が綺麗に抜けたのだ。

《マスター！　十時方向から来ます！》

「その言い方何とかならない！？」

十時と言われてとっさに左を向く。するとそこには、残る左腕を思い切り振りかぶった相手の姿が。

先ほど二時と言われて殴られたから出来たことだが、さすがに軍人でもなんでもない圭椰に、その指示はきつかった。当然のごとく、慣れていないのだ。

剣で受けるように体を移動させるが、途中で思いとどまって剣を真っ直ぐに腕の振られる方向にあわせる。

そして、静かにその剣身を振った。

「グガァ！　クハハハハ！」

残る左腕も切られたことに驚く相手だが、その顔に宿った狂気の笑顔は消えなかった。

その寒気の走る笑い声に、圭椰は舌打ちしながら剣を振るう。

体を捻って、その捻りの回転運動の間に相手の足を一閃。綺麗に切断した。

《マスター。お見事です！》

「どうも。気持ちい感じは全くしないけどな」

《ですが、素晴らしい動きです！　やはり、あなたが…》

「え？　どうした、レイジ？　なにか――――」

「圭ーーーーー！！！！！！」

途中で途切れたレイジの言葉の続きを聞こうと、圭椰が話しかけようとした時、聞き慣れた声がその言葉を遮った。

その声の方向へと体を向けようとした圭椰のわき腹に、人間の砲弾が刺さった。

ドカッ！

「ぐほぁ！」

体の中に溜まっていた空気全てを絞り出されたような声を出した圭椰は、その砲弾と共にゴロゴロと地面を転がっていく。

そして、何とか身を起こした圭椰は、見慣れた顔が見慣れない服を着ていることに気づいた。

「圭圭圭圭！！！　無事で良かったよー！！」

「一ねぇ…。…なに、そのカッコ」

「／／／！！！　圭に見られたーーー！！！！！」

「っておい！　俺には聞きたいことが！」

その服装着ている所を見られたくなかったのだろうか、顔を真っ赤にしながら叫び声を上げて脱兎のごとく走り去っていく一乃。

嵐のような登場と退場に、圭椰は呆然とその姿を追いかけることしか出来なかった。

そして、一乃が走り去った後に現れたのは、同じような格好をした彩香と、学園の理事長。

「り、理事長！？　なんでこんな所にってか彩もその服！」

困惑のあまり、かなりの年上、しかも最高責任者に指を指しながら圭椰は狼狽する。

だが、さすがは大人の貫禄と言う所か。

絃内は軽く受け流して彩香に指示を飛ばす。

「凰魔はお前達技術班が引き取ってくれ。わしはこれからこの者と話す」

「…ん。お兄ちゃん、似合う？」

指示を出されたというのに、ほとんどその指示を放り出して圭椰に向かってポーズをとる彩香。

そのいきなりの展開に圭椰はついていけなかったが、何とか言葉だけは搾り出した。

「…（…む、胸が）え…？　似合ってる、ぞ？　つか、こんな彩見たことないし…」

「…やた…」

小さくガッツポーズしながら、ようやく指示された通りに動き出す彩香。

いつもの朝のようにテキパキと動く彩香を見ながら、圭椰はなんだか嫌な予感を覚えていた。

「帷　圭椰君。これから少しばかり時間を取るが、いいかな？」

紘内　重悟朗香又柄学園理事長のその言葉は、圭椰に重く、重く圧し掛かった。

## 契りの鳳華

絃内に連れられて圭椰が向かったのは、ある意味予想通りの場所。

「えーっと、理事長。話ってまさか、理事長室でやるとかじゃ…」

「そんなおもしろくも何ともない所、誰が使うものか」

「あ、そうっすか…」

そんな会話の元、二人が到着したのは学園内の広場。

圭椰が昼間に一乃と彩香と待ち合わせをした場所だ。

そこに立つ、一本の桜の木。学園の生徒の中では有名な一本桜に、絃内は静かに触れた。

すると、桜の幹がある地面から一本の情報端末が迫り出してくる。

ちょうど旧世代の電話ボックスとでも言うべきサイズのそれに、絃内は懐から出したカードキーを差し込んだ。

「うわ…すげぇ…」

圭椰が目の前に広がった光景に息を飲む。

カードキーを差し込んだ瞬間、一本桜が丁度半分に割れ、そこから先に通路が広がったのだ。

カモフラージュを解かれたその先には、地下へと続く長い階段。
「さて、話はこの先だ。君の姉もこの先にいるはずだがな」
少し物怖じしていた圭椰に構わず、絃内は先に階段を使って降りて行ってしまう。
それに続こうとする圭椰は、階段や壁、その他様々な物に使われている金属に目が行った。
「これ、レイジの剣に似てる気がする…。色は違うけど…光り方か…？」
《これらは全て同じスペルクォーツと言う物質を使ったものです》
「うぉわ！　れ、レイジ！？　お前、どこにいるんだよ！？」
突然話しかけられたことに、圭椰は驚いて転げ落ちそうになる。
間一髪の所で手摺りを掴んだからいいものの、手摺りが無ければ先に進んだ絃内諸共転げ落ちていただろう。
《私ならマスターの元にいます。私たちは装身具型自立進化機能内蔵ＡＩ搭載兵器、レグルスなのですから》
「は？　装身具…長ったらしいなおい」
《つまり、今の状況を簡潔に説明すると、私は今マスターの右人差し指にいます》

「…指輪？　それにしちゃ、やけに機械チックというか無駄に凝ってるというか…」

《それがレグルス、私たちの待機状態です。当然、スペルクォーツを使っていますので鉛弾を喰らった程度では壊れませんよ？》

どこか自信満々に言い放った風の、いつの間にかつけられていた指輪を見ながら圭椰はため息を吐く。

蒼の色を基調に、力強い印象を与えるその指輪。少し間違えれば指を落としそうなぐらいに尖ったその形状に、圭椰は少し安堵を覚えた。

頼もしく見える指輪に、安心感を覚えたのだ。

「ふーん…。で、そのスペルなんとかってのは？」

「それはわしらが説明しよう。その方が早いであろう、まあ座りたまえ」

「はぁ…」

突然開けた空間で、絃内以下数名の大人たちが圭椰を迎える。

いつの間にこんなに深くまで降りてきたのか。

地上から見た階段は先が見えないほどに長かったのだが、話をしていたら終わってしまっていたらしい。

言われた通りに指し示された椅子に座ると、周りにある機械が圭椰の興味を引いた。

「うわ…何だこの機械の量。…ほとんどが空間投影型って、最新型だらけじゃねーか」

「いや、その最新型よりも性能は段違いに高い。ここのスタッフは優秀なのだ」

「スタッフ？　何というか、ここってやっぱり何かの組織なのか？」

「『契りの鳳華（ちぎりのほうか）』。それがわしら凰魔迎撃組織の名前だ」

厳かに言われた組織名と、聞き慣れない単語に圭椰は眉をひそめる。その反応を予想していたのか、絃内は小型の端末のようなものを取り出すと、それを操作した。

小型の情報端末を操作して現れたのは、空中投影された映像。その中では、赤い金属の機械的な翼を持った少女が空を舞っていた。

「一ねぇ！？　な、何で一ねぇがあんなもの使って空飛んでるんだよ！」

「彼女も我々の組織の一員だ。君の妹もね。彼女らはレグルスウォーリアーとして、凰魔と戦っている」

「凰魔って、あの俺が切った奴？」

「その通りだ」

そこから絃内はさらに映像を移動させ、説明を始めた。

凰魔。世界の流れ者。突然現れては破壊を繰り返し、満足したかのように忽然と姿を消す正体不明の存在。

人と似たような機能や思考を持つが、会話はほぼ成り立たないのが現状。

その敵を迎撃するための設備が揃った場所、香叉柄学園地下、契りの鳳華本部。

そして、そこには凰魔迎撃用の兵器、レグルスが保管され、それを扱うウォーリアーたちも在籍している。

「え？　じゃあ、レイジがレグルスだって事は、おれもそのレグルスウォーリアーって事になるのか？」

「ああ。そして、君がよく知る人物たちもウォーリアーだ」

「？？？」

スペルクォーツ。世界に様々な種類がある多種多様の金属を、一度分解そして再結合させた新物質。

硬度、柔軟性、耐熱、耐圧など様々な面において優れており、レグルスなどの機械部品は全てスペルクォーツが使われている。

生成環境に左右されやすく、最終的な品質は何も変わらないが、そ

の金属の色が変わる。熱ければ赤。冷たければ青などだ。

「へー。そんな物質があるんなら、世の中の全てが変わるな…」

「そう。だからこそ、その存在は公にはされていない」

「え！？　あ、やっぱり争いが起こるのか…ちっ」

レグルス。人を補佐し人と共にあるために開発された、装身具型の機械。

円滑な操作性を実現するため、それぞれに個性的な性格のＡＩが内蔵されている。視野の拡張や身体能力の強化、果てには障害を乗り越えるための自己進化機能など、並大抵の機械にはできない機能を持つ。

だが、今となってはその存在を隠蔽され、凰魔専用の迎撃武器となり契りの鳳華によって管理、保管がなされている。

そして、ここまでの説明を終えた絃内がディスプレイを消し、圭椰に改めて向き直った。

「ここまでで、何か質問はあるかな？」

「あるっちゃあるけど…今は聞かない。どうせ、俺もここで働けって言われそうだしな。その時に逐一教えてもらうさ。今は頭がパンクしそうなんだ」

「そうか…。そこまで考えていたとは、さすがだな。聡明な男という評価は間違いではなかったようだな」

「いや、あれだけ隠蔽されてるだとかなんだと言われたり、一ねぇや彩香がそんな事に携わってたなんて知らなかったから、納得しただけだって」

「ふ…ずいぶんと頭が回るのだな。普通なら混乱して狼狽する所であろうに」

柔らかく笑いながら、圭椰に嫌味にも聞こえるような台詞を言う紘内。

だが、そこは今まで同じような言葉を何度も聞いてきた圭椰。

いつものように肩を竦めながらその言葉を肯定しながらも否定した。

「いえいえ。頭の中じゃあてんやわんやですよ。それに、俺はこうならなくったって決めてましたから」

「決めていた？　何を決めていたのだ？」

挑戦的な笑みで、まるで品定めをするかのような視線を圭椰に絡ませてくる。

やはり長くは生きていないということだろうか。

心の奥まで見透かしてしまうような視線に、圭椰は折れた。

「…守るって。みんなの、大切な人たちの笑顔を守るって。この力を手に入れる時に、そう決めたんです」

右手の人差し指にはまった、彼の力の象徴である指輪を見ながら圭椰は言う。

相手はもう気づいているかもしれないが、それでも良かった。

自らのために、確認をなすために。

別に戒めなどとは思っていない。ただ、これだけは言っておきたかったのだ。

これから、上官になるであろう男に。

「守りたいから、笑顔を。だから、そのためなら俺は何だってする。それだけは、誰にも譲らない、譲れない俺の覚悟だ」

## 戻った平穏

「やべー…すっげー恥ずかしいこと言った気がする…」

その後からの話は後日ということになり、圭椰は一人とぼとぼと歩いていた。

探検してみようかとも思ったのだが、やたら滅多に広いあの中を一人で歩く気にはなれなかった。

だからこそ圭椰は本日二度目の家路についているのだが、その道中で先ほど言った言葉を思い出して頬を恥ずかしそうに掻いていた。

ちなみに、その圭椰の言葉には誰も答えない。

外では基本的に喋らないとレイジと約束したからだ。誰も指輪に話しかけるような痛い人にはなりたくないのだ。

だが、その約束を取り付ける際にやけにレイジがグズったので、外でも他に誰かがいないときのような状況では喋ってもいいと約束した。

しかし、レイジはなぜか喋らない。

そんなレイジに少し不満を覚えながらも、圭椰はいつの間にか着いていた自宅の扉を開けた。

「ただいまー。…あれ？　一ねぇも彩香も帰ってるのか？」

扉を開けた先には、見慣れた家族の靴。

あんなことがあった後では、明らかに帰りが遅いと踏んでいた圭椰は些か驚いてしまう。

その事に少し圭矢の頬は緩むが、すぐにその顔は苦痛の表情に変わる。

「圭！」

「お兄ちゃん！」

そんな二人の家族の突進を一気に喰らった圭椰は、もんどり打って玄関に倒れこむ。

姉は分からなくもないが、妹のその過激な動きに圭椰もまた驚いた。

「いてて…。二人共？　どいてくれるとうれしいんだが…」

「やだ」

「……」

圭椰の提案に、一乃は抱きしめる力を強めて断り、彩香は無言だが首を横に振った。

そんな二人の家族の気持ちに、圭椰はその背中を撫でることで答える。

心配させてしまったことは絃内から聞いていた。

毎回毎回吹き飛ばされる家族の姿を見せられては、心配しない方がおかしいというものだ。

「…心配してくれて、ありがとな。制服も綺麗なものに変えてもらったし、怪我もない。俺は無事だから」

さすがにボロボロの制服で外を歩かせるのは忍びないと思ったのか、絃内は代わりの制服を圭椰に与えていた。

その服に着替えて帰ってきたことと、怪我がないことを示す為に体を見せようとする圭椰だが、一向に二人が体を動かす気配はない。

泣いている訳でもないのに、なぜかまったく動かない。そ、まるで寝てしまったかのような———

「すー…へへへ…」

「…うにゅ…」

「ってほんとに寝てるのかよ！」

だらしなく緩んだ顔で眠る一乃に、静かな安心しきった顔で眠る彩香。

そんな姉と妹を見て、圭椰は薄く笑った後一人一人担いでリビングのソファーに寝かせる。

さすがに二階まで運ぶほどの力は残っていないので、取って来た毛布を二人にかけてやった。

「…飯…作るか…」

時刻は午後七時。

ちょうどいい時間ではあるが、今から作ろうと思うと少し遅い。

だが、寝てしまった二人を見て、圭椰は冷蔵庫の中を漁って料理の準備を始めた。

目に付いたのは、残っていた卵と、少しばかりのお肉。

それらをキッチンに並べていく圭椰だが、どうやっても普通の料理が出来る材料ではなかった。

「…牛肉か…鶏肉が無いのが痛いな…。ま、偽親子丼でいいだろ。味を少し薄めに作れば、牛肉でもいけるはず…」

メニューを決めると、すかさず料理に取り掛かる圭椰。

手馴れた手順で、料理をテキパキとこなしていく。

料理の途中にソファーのほうから声が聞こえたが、圭椰は一旦それを無視して料理を作る手を止めなかった。

「…うにー…なんかいい匂い？」

「起きたか」

「あ、圭。おはよー」

「こんばんわだこんばんわ。もう八時まわってるよ」

体を伸ばしながら起き上がった一乃が、鼻をひくつかせながら辺りを見渡す。

その姉の動きを見ていた圭椰は、出来上がった料理を机に並べていく。

「……すー…」

「彩ちゃーん。起きろー、ご飯だよー。圭の手料理だよー」

「！！！」

圭のという辺りで彩香がきれいに飛び起きる。

そして、滅多に見せない俊敏な動きで椅子に座ると、寝起きだというのに目の前に置かれた偽親子丼をがっつき始めた。

「…？」

「…ご飯粒、ついてるぞ」

頬についていたご飯粒を圭椰がやれやれといった風にとってやると、彩香は初めて自らを起こした姉を見た。

まじまじと見て、ぽかーんと開けている口に箸を突っ込む。

———何もついてない、ただの乾いた箸を。

「…おいしい、よ？」

「あ、あたしも食べるもん！　全部！」

「こら、それは俺のだ」

食事を終え、自分の部屋に戻っていた圭椰は、右手にはめられている指輪を眺めていた。

蒼い色の、金属特有の光沢を放つ指輪。

その指輪に秘められたのは、彼にとっての力。彼の好きな、笑顔を守るための指輪だ。

「…俺には、何が出来るのかな…」

ただ、その指輪を眺めながら呟く。

ベットに寝転び、その指輪を光に透かすようにかざす圭椰。

力を持ったとしても、それを使う機会は限られている。

昼時に起こった凰魔との戦い。もし一緒に戦う事があったら、守りたいと思った。

けれど、その回数は今の所ほとんどないという。圭椰が戦ったときにも、戦闘経験は四回にも満たなかったそうだ。

「それでも…この日々を、俺は壊したくない。…バカやって、遊んで…この日々が護れるなら、俺は戦うさ」

決意を新たに、圭椰は掲げていた右手を握り締めた。

力強く、それでいて優しく。

「圭ー？　お風呂沸いたよー？」

「分かったー」

だから今は、この平穏を。

束の間かもしれない平穏だけれども、それでも戻った平穏の幸せを噛み締めよう。

来るべき、戦いのために。平和を、忘れない為に。

## 家族の時間

「おっはよー！　お姉様の健康診断だよー！」

「…帰れ」

「もー、そんなつれないこと言わない…」

「帰れ」

帷　圭椰の朝は、自らの姉を部屋から追い出すことから始まる。

毎度毎度起こしてくれるのはありがたいが、その時間がやけに早い。

まあ、料理当番である圭椰としては問題ないのだが、朝起きると目の前にあるのが姉の唇というのも刺激的だ。

一乃なりのスキンシップと言うことで理解している圭椰にとっては、もう慣れた光景でもある。

陣平などの男友達にそういう事を話すと殴られそうになるのだが。

とりあえず、迫ってきていた一乃をベットの端に追いやり、圭椰は自らの体を起こしてキッチンに向かった。

「…何作るかな…あ、もう面倒くさいからトースト系でいいか。それにしよう、うん」

勝手に自分で納得しながら、圭椰は頭の中で朝食のメニューを考える。

そんな事に頭を巡らせていると、帷家の決して広くない庭の中で作業をする妹の姿が目に止まった。

庭に咲いた花に鼻歌まじりで水をやる彩香。

その光景は今まで生きてきた中でまったく変わらない行為だったが、その光景の中の異質なものに圭椰は目を奪われる。

「…そっか…もう一週間になるんだよな…」

「……？」

庭に置かれた大きな機械。そして、その周囲に並べられた調整待ちのもの。

隠す必要もないからと、彩香は庭に自らの仕事を持ってきていたのだ。

彩香の仕事とは、レグルスの調整、修理である。

圭椰はまったく知らなかったことだが、彩香はプログラミング能力でいけば契りの鳳華ではトップクラスの腕なのだ。

その事を思い出し、圭椰は右手にはまった指輪を見つめた。

《マスター、そろそろ朝食に取りかかりませんと遅刻しますよ？》

「お？　分かった。彩、そろそろ終わらせて家に入っとけよー」

圭椰のレグルス『剣刀閃（ブレイザーエッジ）』、通称レイジからの忠告を受け、圭椰はキッチンへと向かう。

時刻は午前七時。

圭椰が始めて力を手にしたその日から、一週間が経過していた。

「んー！　トーストだけなのに、何でこんなにおいしいのー！」

身をクネらせながら、一乃が頬張ったトーストの味を評価する。

正直、年頃の乙女がするような顔と体の動きでは全くないが、弟と妹はそれを綺麗に流していた。

三人の目の前にあるのは、丸い形のトースト。

実はこのトースト、パン生地から圭椰が一人で完全自作したものだ。

何が原因だったのかまったく覚えていないが、一乃にパンを作ってくれと頼まれたことがあり、それで作ったっきり圭椰は市販のパンを購入していない。

理由としては、「こっちの方がおいしいし、格段に安上がり」らしい。

「…バター…変えた？」

ふと、彩香が食していたトーストを片手に圭椰に質問する。

「ああ、変えたぜ？　つっても、作り直した時に少しだけ砂糖を入れてみたんだが」

「…甘い…でも、これはこれで…」

「そっか。なら当分の間はこれだな」

ちなみに、この家にある主だった調味料以外の物は全て圭椰の手作りである。

粉末状の物は一部を除いて市販だが、作れるものは作ってしまおうと言う圭椰の意志だ。

それでも、家でバターやパンが作れる人間はそうそういないとは思うが。

「あ、そうそう。もうしゅぐおとうひゃんたちかえってくりゅって」

「なぜ途中でものを食べ始めた…」

「…汚い…」

一応伝わってる事は伝わっているが、それでも注意せざるを得ない。

姉のそんな態度に弟と妹は呆れるが、その聞こえてきた内容に喜ん

でいたりもしていた。

「で？　いつ頃なんだ？」

「…んーっとね…」

携帯を取り出し、その中に出された情報を投影させてテーブルの上に表示させる。

映し出されたのはメールの文面。

どうやら母親からしい。

ｔｏ：一ちゃん
Ｒｅ：ご飯食べたーい
：近日中に帰るからねー。お父さんも一緒だよー？　おかーさんは今、博覧会でフランスにいまーす。お土産何がいいかなー？　圭ちゃんと彩ちゃんにも聞いておいてねー。
ｐ．ｓ．圭ちゃんの料理が食べたい！

「……」

全文を読んだ圭椰はとりあえず無言になる。

何とも自由な親だ。しかも近日中とは。

「…お兄ちゃん、私、お肉が食べたい」

「あ、賛成さんせーい！」

投影させていたメールを片付け、一乃が彩香の提案に乗ってくる。
その提案にしばし圭椰は考えた後、結論を言い渡した。
「それでいいか。料理が食べたいっつても、指定してこなかったのが悪いんだしな。あと、フランス土産なら何かお菓子だ」
「…私は…お花の種…」
「オッケー。お母さんにはそう伝えとくね？」
圭椰と彩香は、両親のメールアドレスを知らない。
その理由は、両親が伝達役は一人で充分、三人にもメール回すの面倒くさい。と言う理由からだ。
家族会議が簡単に行える仲の良さだから良いものの、なかなかに投げやりではなかろうか。
そんな事を思いながら、圭椰は最後のトーストを口に頬張り、考えを巡らせた。
安売りの日はいつだったかなと。
「圭ー。今日の放課後、理事長が呼んでたよ？」
「は？　何で理事長が俺の事…」
「裏で話があるんだってー。大丈夫、あたしと彩ちゃんもいるから！」

「……！」

無言で自信満々にブイサインをかます彩香。

似合っているような似合っていないようなその仕草に、圭椰は少しだけ笑った。

「…じゃあ、また後日話すって言われた件か？　ま、何でもいいが…」

「実戦練習だよ！」

「は？」

どどーんと言う音が聞こえそうなぐらいに胸を張って答える一乃。

その意表をつく答えに、圭椰は間抜けな声を出すしかなかった。

「実戦練習だよ！」

「いやいやいや、二回も繰り返さなくていいから」

「実戦練習だよ？」

「疑問形になる必要は無い！」

《実戦と言うことは、実弾を交えた訓練と言うことでよろしいのですか？》

いつものノリでそんなボケとツッコミの漫才が始まろうとしたとき、レイジの質問が二人を割いた。

「うん。だって、実戦だもん」

「だもんって…」

一乃の物言いに疲れたのか、ドカッと椅子に座り直す圭椰。

「…お疲れ…ちなみに、私は出ないから…」

「いや、それは分かってるけどな」

慰めるように言った彩香の言葉も、今の圭椰には届かない。

《マスター、良い機会です。マスターには私の事をもっと知ってもらいませんと》

「実戦、ねぇ…はぁぁ…」

ただ、力なく項垂れながら、圭椰は深くため息を吐いた。

## 初めての実戦

圭椰は終始上の空だった。

まあ、放課後にはわざわざ戦わなければならないのだ。

それに、今では沈黙を保っている右手の人差し指にはまった相棒は、口調がどこか楽しげであったことは確かである。

そんな面倒くささたっぷりの事柄に、圭椰は絶賛憂鬱だった。

「おーい帷ー。どした、熱でもあんのか？　そんな時はこの筋肉みたいに鍛え上げれば…」

「うるさい黙れ堕ちろクズ肉」

殴る気にもなれず、腕をまくりながら筋肉を見せてきた陣平に罵声を浴びせる圭椰。

その罵声に顔をしかめる陣平だが、それでも話しかけるのを止めない。

「何かあったのか？　お前、ここ最近ボーっとしてるじゃねーか。俺様の目はごまかせないぜ？」

「あー、はいはい。あ、俺、用事あるから帰るわ」

「お、おう…。…どうしたんだあいつ」

「…あなた、何も聞いてないの？」

「？　何がだ？」

「…もういいわ」

呆れた菜美の声が、陣平の心を綺麗にぐさりと削り取った。

ウィーン…

圭椰の目の前にある扉が自動的に開いていく。

一枚二枚と重なった扉が順序良く開くのを待ってから、圭椰は扉の奥に足を踏み入れていった。

靴音が響く金属製の通路を通りながら、圭椰はふと考える。

「…そういや、ここまで来たのはいいけど、どこに向かってんだ？」

『只今より、戦闘訓練を行います。指定ウォーリアーは待機ベットへ』

圭椰の質問に答えるような形で、通信士のアナウンスが通路に響く。

そして、その言葉に反応するかのように通路が変化していく。
突然扉が閉まり、圭椰のすぐ右横の壁が開いた。
《隔壁が開放され、その場所までの最短ルートが形成されています》
「そうなんだ…ってか、よくそんな事が分かるな、レイジ」
《伊達に機械をやっておりませんので。この本部の地図ならデータに入っています》
「え、じゃあお前がいたら時間も場所も間違わなくて済むじゃん。ラッキー」
右手にあるレイジに道案内をされながら、圭椰はどんどん進んでいく。
そして、その歩いていった先には一乃と彩香が待っていた。
彩香は制服のままだが、一乃は一週間前に見たスーツのようなものを着ている。
「ようやく来た！　はい、圭！　これに着替えて！」
「…まさかとは思うが、一ねぇと同じような奴？」
「同じだけど、少し違うの。ほら早く！　更衣室はあっちね？　…着替えるの、手伝ってあげようか？」
「却下」

一乃の誘惑をバッサリと切り捨てると、圭椰は手渡された服を持って更衣室とやらに入っていった。

やけにでかいロッカーに、今まで着ていた制服を入れる。

そして、代わりに手渡された服――やけに肌触りのいいさらさらとした服――を窮屈そうに着始める圭椰。

「…俺のは半袖なのか？　それに、何で太腿に穴が…」

ブツブツと文句を言いながら、着替えを完了させた圭椰は家族の前に現れる。

「おー！　似合ってるよ！　かっこいいー！　さすが圭…／／／」

「…ん…お兄ちゃん、これ…」

「ん？　ああ、インカムね。これでいいか？」

「…も少し、右。骨伝導式だから、密着させて…」

なぜかトリップしてしまった一乃を頬って置いて、圭椰は彩香に手渡されたインカムを装着する。

カチューシャのような薄いインカムは、圭椰の手が離れると自動的にその口径を縮め、頭にフィットした。

「おお。最新型ってやっぱすげーな」

『そこにも改造がなされているがね。気分はどうだ？　エリシュスーツを着けてみて。不具合があればすぐに言ってくれ』

インカム越しに絃内の言葉が圭椰に届く。

その言葉通りに、圭椰は体を一通り動かして確認した後、問題がないことを伝える。

絃内はその言葉を聞いて安心したように息を吐くと、圭椰が着ている服装とこれからの事について説明し出した。

『まず、そのエリシュスーツは耐火防塵に優れた代物だ。生半可な攻撃では破れもせん。ただ、所々皮膚が露出しているのでそこは気をつけたまえ』

「なんで皮膚が出てるんです？　全部に密着させて、もう少しゴツゴツさせた方がいいでしょう？」

『それは、レグルスの機構具現化システムを有効に使うためだ。やはり、直接肌で触れた方がシンクロ値は高くなるからな』

「はー…。さっぱり分からん」

『いずれ分かる。次に、今からお前たちにやってもらうことは、簡単に言ってしまえば模擬戦だ。三対三、これが本来凰魔と戦うための基本形態だ』

「へー」

『相手方も三人用意してある。お前たちにも後一人遅れて来る。開

始は三十分後だ』

インカムから流れる絃内の声が止まり、しばし静寂が訪れる。

だが、黙っていても仕方が無いので圭椰はゆっくりと口を開いた。

「あっちにも三人。で、こっちにも三人。俺と一ねぇで、後一人か」

「うん…。私、今回は出れない、から…」

「気にすんな。つか、俺としては一ねぇにも出てほしくないんだけどな。お前らが戦ってるなんて、俺は見たくないからさ」

彩香の頭を撫でながら、笑ってそう言う圭椰。

本心からの言葉だったが、それでも妹は反抗した。

「…や…私も、お姉ちゃんもやだ…見れるだけはやだ」

「…そっか。分かった。でも、護る事はかわんねぇから」

最後にグリグリと妹の頭をいじった後、圭椰は一乃の元へと向かう。

そして、手刀を一乃の頭の上に落とした。

「みぎゃっ！」

「いい加減に帰ってこい。もう一人が来たらみっともないだろうが」

「うぅー…いたいよー…」

「痛くしたんだからな、当然だ」

殴られた頭を抑えながらうずくまる一乃に、圭椰は特に何の感情も抱かずに見つめる。

このままでは埒があかないと思った圭椰は、おもむろに一乃の肩を持ったかと思うと、強引に立たせた。

そしてその行為は、二人の顔が至近距離に近づくと言うことであり

――――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

「あ…／／／」

だが、そんなに現実は甘くない。

少しばかり顔を赤くした一乃が圭椰の方を向いてしなだれかかった時、珍客があった。

「お邪魔しまーす！　ボクの名前は弓希　颯！　よろしくねー！…って、あれ？」

かなりテンション高く入ってきたのは、短髪にゴーグルの少女。

重点的に足の部分に突起のついた、お腹が大きく開いたエリシュスーツを着た少女は、目を丸くした。

一人の少年が、一人の少女の顔を握って遠ざけている光景に。

## ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5219ba/

―Legurus―　ただ、笑顔のために

2012年1月14日14時53分発行